

# 博物館と図書館

——日本蚕糸業史研究当時の経験の断片——

瀧澤 秀樹

一

現在の私の研究対象は公式的には「今日のアジア経済」、自覚的に限定して言えば「Area Studiesの一分野としてのKorea学」ということになるが、私の社会科学の本格的スタートは明治以後の日本の蚕糸業史研究であった。現在のKorea学とかつての日本蚕糸業史研究の姿勢に連続性があるとすれば、第一に問題意識として「講座派」と「大塚史学」に強い影響を受けてきたこと（とにより思考の枠組が両者に規定されてきたこと）、第二に、何らかのことを語るに際してその資料的根拠を明示しようと努力していることであろう。「構想力」（敢えて「想像力」と言い換えてもよい）を欠いた学問は存在し得ないだろうが、「構想力」だけでも学問は成立しない。いわゆる「実証史学」云々の

レベルとは離れたところで、私は社会科学が経験科学であり実証科学であることに固執している。

しかし、外国研究としてのKorea学と近代日本蚕糸業史においては、「実証」のレベルに差があるのも当然のことである。Korea学においても、宮嶋博史氏の朝鮮土地調査事業研究に代表されるような歴史研究においては在地文書の類の「第一次資料」（実は厳密さを欠くこの用語を、私は好まないが）の詳細な分析を基礎にしているが、私の現代韓国研究は主として公開された統計資料の分析に依拠している。それを補っているのが、現代韓国文学などから得られる「想像力」である。分析の方法において韓国現地の学者たちとも異なる独自性を持つと自負するところはあるが、いずれにせよ、「二次資料」の分析という限界を持つことを自覚しているのも、事実である。（とはいえ、いわゆる

「一次資料」を分析した研究が、それだけで学術的優位を占めると考えるのではない。この点についての私の考えについては拙稿「近代Korea経済史研究と史料の問題」、高秉雲編著『朝鮮史の諸相』雄山閣、一九九九年、所収で関説するところがあった。）

ところで本稿で述べようとするのは、上述の論点とのかかわりにおいて、「一次資料」「二次資料」の存在（保存と整理された状態を含めて）における博物館と、基本的に公刊された書籍を所蔵する図書館の関係についての、かつての私自身が経験したことから断片である。

## 二

こうした主題のたて方自体、奇異な印象を与えるかもしれない。一般に博物館とは収集物を公開・展示するのが主な機能であり、一般向けの開架図書以外の膨大な蔵書数を競う図書館とは、資料を提供する方法が全く異なるからである。私自身、熱心な探訪者ではないにしてもそれなりに経験してきた博物館見学は、パンフレットや展示物周辺の説明文を「読み」ながら、展示物を「見る」（観賞する）ことであった。それに対して図書館は、目的のために有益な知識や情報を与えてくれる書物を「探し」、（多くの場合、必要部分を複写——以前は文字通り「筆写」であった！——したのち）それを「読む」ための施設であると考えられているからである。

しかし博物館のなかにはそうした常識に合わないものもある。私たちの大阪商業大学商業史博物館にしても、公開された展示物のほかに

（博物館と一体の比較地域研究所所蔵の形をとって）膨大な「一次資料」としての近世文書や古地図を所蔵して、研究者に提供しているという事実がある。

ここでは、そうした個性のある博物館として研究者の間に知られている長野県岡谷市の岡谷市立蚕糸博物館所蔵の「一次資料」に接した、私の経験について記してみたい。

現在の岡谷市の市街地は、明治二〇年代から昭和初年まで、日本の製糸業の中心であり続けた、諏訪郡平野村・川岸村・湊村から成っている。「中心」とは言っても、日本の最大の輸出品であり続けた生糸を生産する製糸業は、原料繭の生産（養蚕業）地域の拡大を伴ってひろく全国（自然的条件から養蚕の困難な北海道・沖縄県など一部を例外として）に、さらに植民地朝鮮にまで拡散して行くから、諏訪製糸業が圧倒的部分を占めたわけではないが、諏訪地方で生まれた信州系製糸資本がその拡散をリードしたこともあって（郡は製糸などの関西系資本がそれに対抗する）、諏訪の製糸資本の動向が日本製糸業（養蚕業・絹織物業等を合わせて蚕糸業）の中心に位置し続けたのが事実であった。（横溝正史の『犬神家の一族』に素材を提供したのが、彼らであった。）

岡谷市立蚕糸博物館は、その岡谷の地にある、研究者の間では広く知られた、そして一般観光客には殆ど知られることのない、博物館である。

勿論、博物館というに相応しい展示物もそれなりに揃っている。殖産興業政策の目玉として設立された官営富岡製糸所の開設時に、フラ

ンス人技師ブリューナが持ち込んで設置したフランス式繰糸器械などは、その代表的なものである。

蚕糸業研究者にとつての貴重な資料は、明治以降の諏訪製糸業の経営に関するものであるが、製糸工女の争奪防止を目的に設立された、製糸資本家の地域内カルテルとでも言うべき諏訪製糸同盟関係の資料、諏訪系製糸家としてはトップクラスに次ぐ経営規模を持った笠原家の経営に関する資料が、その代表的なものである。私が主に利用したのは、後者のなかでも製糸工女ひとりひとりの給金を細かく計算した原簿である、各年度の『製糸計算簿』であった。それをもとにして、等級賃金制・賞罰賃金制・前貸賃金制の三者を組み合わせた、諏訪製糸業における繰糸工女の賃金体系のあり方を分析したのである（具体的内容は、拙著『日本資本主義と蚕糸業』未来社、一九七八年、参照）。

### 三

蚕糸業史研究の過程で図書館所蔵の文献資料にも大きく依拠したことは、言う迄もない。（実は文献資料に関しては在庫目録を見て取り寄せた古書店からのものが、いっそう大きな部分を占めていた。『第一次資料』に関して、資料収集旅行中に偶然見つけた長野県松本市所在の古書店から、私費で購入したものがかなりあった。）

とくに、近代日本の経済雑誌について体系的な研究を続けていらっしやうした杉原四郎先生を研究代表者とする研究グループが文部省の科学研究費補助を受けたため、「蚕糸経済雑誌」を担当した私は、明治

期から昭和初年にかけて全国の蚕業地帯で無数と言えるほど刊行された地方の蚕業雑誌を求めて、多くの図書館を回るようになった。この点で特に多くの収穫を得たのは、東京大学農学部、信州大学繊維学部（もと上田高等蚕糸学校）、京都工芸繊維大学（もと京都高等蚕糸学校）の図書館での調査においてであった。

とくに京都工芸繊維大学での調査は憶い出が深い。

蚕糸業は日本で斜陽産業となつて既に久しく、蚕の品種改良や桑の栽培技術の研究などにおいて西日本最高の水準を誇つた京都高蚕を前身とする同大学も、教育研究内容において事実上蚕糸業は殆ど無視する存在に変身してしまつていた。それでもかつての伝統の遺産と言ふべきか、図書館の書庫には膨大な（実に膨大な！）蚕糸業関係の文献資料が埃をかぶつて眠つていたのである。同大学に在職していた知人の紹介で特別に書庫への入室を認められた私は、その未整理の資料を一冊ずつ手にとってメモをとるといふ、気の遠くなるような作業に没頭した。

蚕業雑誌の調査に一応の区切りをつける意味で、研究ノート「戦前日本の蚕業雑誌」（『甲南経済学論集』二二巻四号、一九八一年八月）で存在を確認できた蚕業雑誌リストをまとめ、所在を確認した場所を明示したのだが、その後、「リストでは『京都工織』にあることになっているが、同大学の蔵書目録に欠けている」という問い合わせが相次いだ。

一私立大学の一学部の「紀要」に掲載した研究ノートにそれほどの

人の眼が注がれていることに感動しつつ、正確に返答するにはどうしたらよいかと当惑したのが事実であった。

#### 四

さて、岡谷市立蚕糸博物館の話に戻る。もっとも、当時の研究成果については既に発表済みであり、ここでは同博物館での資料調査にかかわる失敗談のいくつかを記しておきたい。

最初に同博物館を訪れたのは、一九六八年の三月で、当時まだ（東京大学）経済学部助手であった石井寛治氏に誘われて、二人での訪問だった。石井氏は同館の学術顧問とも呼ぶべき伊藤正和氏と既に旧知の間柄で、石井氏の紹介で私と同館とのつながりがはじまったことになる。

その時の訪問にかかわる憶い出をふたつばかり記しておこう。ひとつは、修士論文の審査がおわった私が、学位記授与式よりも石井氏との調査旅行が嬉しくて、その日程を優先させたことである。当時、東京大学は医学部の学生処分問題に端を発して、数ヶ月後には「全学バリケード封鎖」に至るという学園紛争の序曲の時期であった。大学院経済学研究所の自治会は大学当局に抗議して「学位記授与式ポイコット」を決議し、教授会と対立した。殆ど無頓着に学位記授与式を欠席した私は、教授たちからは「ポイコット」に同調したとみられ、学友たちからは「卑怯な逃亡者」となった。

そんなことは露知らず、はじめての蚕糸博物館でいささか興奮気味

であった私は、旅館に帰ってもその日の調査の整理に余念のない石井氏を見て、「学者魂」とはこういうものかと感じ入ったのだが、その石井氏が春場所千秋楽の実況テレビだけは見ようと言いつつ、豊山が優勝をのがして若浪が平幕優勝した場面で、「全く何をやってるんだ」と口惜しがったことに、新鮮な感動(?)を覚えたことが、もうひとつの憶い出である。石井寛治氏（東京大学教授を経て、現在は東京経済大学教授）にそのような面があることは、今でもあまり知られていないのではないかと思われる。

貴重な体験であったにもかかわらず、学園紛争が激しくなるなかで私の蚕糸業研究も一時中断せざるを得なくなり、一九七〇年に甲南大学に就職してから、本格的な研究再開となった。

一九七三年頃だったと思うが、石井寛治氏と海野福寿先生の二人が、神楽の資料を見に神戸にやって来て、私とゼミ生のY君が手伝った。

（神楽は関西で最大の生糸売込問屋で、関東大震災後に神戸港からの生糸輸出がはじまる迄は、神楽横浜支店が横浜の有力売込問屋と肩を並べていた。）資料にライトをあてて一眼レフの大きなカメラにレリーズをつけて連写するやり方に、私はすっかり魅了され、すぐに道具一式を買ってそろえて、その年の夏休み、同じY君を連れて岡谷の蚕糸博物館を訪ねたのである。「この方法ならあの資料が分析できる！」と頭に浮かんだのが、前述の笠原家の『製糸計算簿』だった。

それから約三年間、春休みと夏休みごとに、学生ひとりを助手にし、私は同博物館に通った。

写真を焼くとコストがかさむので、現像したフィルムを手動式のマ  
イクロリーダーで読んだ。二〇〇本のフィルムから十数冊のノートが  
出来て、製糸工女たちについての私の論文になっていった。

大きな失敗を、二度やってしまった。一度目は、シャッターが切れ  
ていないのにフィルムを次のコマにすすめてしまい、現像したときに  
なって一ページ飛んでいることに気がついたことである。致命的とい  
うほどの失敗ではないが、その空白の一ページのために、私はさらに  
一度、神戸と岡谷を往復しなければならなかった。

## 五

ふたつ目の失敗を、研究内容の本質にかかわるかなり重要な点でお  
かしてしまったことについて正直に記しておこう。

『製糸計算簿』には、工女ひとりひとりについて、「一等甲」「一等  
乙」「二等甲」……という具合に等級がつけられ、その等級は当該工  
女の日給および年間総給金にはほぼ比例している。「これが等級賃金制  
度だ」と私は確信し、そのように論文も書いた。

しかし、疑問が残る。等級が日給を規定しているのか、日給が等級  
を規定しているのか。諏訪製糸業においては全工女の給金総額を予め  
決めておいて、工女相互の競争をおおる「相対効程制度」が成立して  
いたというのがすでに定説であったから、前者が正しいようである。  
しかし証明の方法がなかった。

この点については、多くの研究者の間で論争があった。石井寛治氏

も、拙著に対する書評でその点についての私の見解を批判された。

数年後になって、久し振りに蚕糸博物館を訪ねて『製糸計算簿』を  
手にしたとき、私は脳天をガツンとやられたような衝撃を覚えた。

『製糸計算簿』の等級名は、墨の色が他の部分と違っていて、明らか  
に事後的に記入されたものであった。工女の「成績」ことに日給が決  
められ、それに見合う「等級」が付けられていたことが、明白である。  
フィルムをマイクロリーダーを通して見るやり方では、そこまでは判  
別できなかったのであった。

既に私の主要な研究対象が現代韓国社会に転換して後のことであ  
り、既発表の分析に修正を加える機会は未だない。おそらく、その機  
会はずっと来ないだろう。研究者はその一生の研究生活の過程で、何  
度かこのような衝撃を味わう宿命があるのかも知れないと、今にして  
思う。

私の後も、蚕糸博物館の資料は多くの研究者によって利用され、今  
日ではその存在は近代日本産業史を研究対象とする人びとにひろく知  
られるに至っている。同博物館所蔵の資料を利用した新しい業績が発  
表される度に強い関心を持つのは、私の若き日の情熱を傾けた回帰点  
がそこにあるからなのであろう。私の分析の誤謬も含め、ここでこの  
ような形で記録しておきたかったゆえんである。

## 六

本稿はもともと、博物館相当施設として認められた大阪商業大学

商業史博物館の館長兼務を命ぜられたのを機会に（当博物館は私が所長を務める比較地域研究所と「一身同体」である）、岡谷市立蚕糸博物館のユニークな成り立ちについて、きちんと紹介することを目的としていた。

しかし、七月初旬に突然の病魔におそわれてから、新しい調査も文章の執筆すらも困難になったこの夏、せめて館長として最低の義務を果たそうと、追憶談のように書いたのがこの文章である。

関係各位におかけした御迷惑についてお詫びするとともに、私たちの博物館をより存在意義のあるものに育てるべく努力する決意を新たにしていることを、御報告したい。